

# 軟部組織肉腫

## ●プロフィール

- ・ 定義：軟部組織から発生する悪性間葉系腫瘍（肉腫）。
- ・ 挙動：局所浸潤性強く、低～中程度の遠隔転移性。
- ・ 発生部位：皮膚・皮下組織が最も多い。
- ・ 組織型：線維肉腫、血管周皮腫、末梢神経の腫瘍（神経鞘腫、神経線維腫、悪性神経鞘腫、神経線維肉腫が含まれる）、脂肪肉腫、悪性線維性組織球腫、平滑筋肉腫、横紋筋肉腫など。
  - （犬）線維肉腫、血管周皮腫が多い。
  - （猫）線維肉腫が多い。臨床的にワクチン関連肉腫の発生が問題となる。
- ・ 治療法：外科手術による広範囲拡大切除が第一選択。完全切除不能例では補助的に放射線療法。高グレード腫瘍やリンパ節転移・遠隔転移症例に対しては抗癌剤による補助的的化学療法も考慮。
- ・ 予後因子：腫瘍の大きさ、組織学的グレード（高グレードは高転移性）、マージン、転移の有無など。

## 【猫ワクチン関連肉腫】

- ・ 定義：ワクチン接種が発生原因として考えられる肉腫。ワクチン接種後、数ヶ月～数年で接種部位に発生。
- ・ 年齢：通常的肉腫よりも若い猫に発生する（6～7歳がピーク）。
- ・ 挙動：局所浸潤性が極めて強く、低～中程度の遠隔転移性。進行性で術後の再発率が高い。
- ・ 治療法：外科手術による広範囲拡大切除が第一選択。周辺筋肉や骨組織までも含めた切除が必要。完全切除不能例では補助的に放射線療法。リンパ節転移・遠隔転移症例に対しては抗癌剤による補助的的化学療法も考慮。

## 【臨床症例】

### \* 犬の肉腫

- ・ 症例：ペキニーズ、9歳3ヵ月齢、去勢雄。
- ・ 主訴：左後肢の跛行。
- ・ 症状：左後肢の跛行、一般状態は良好。
- ・ 検査：左外側大腿部の皮下に腫瘤病変確認。腫瘤は筋間に存在し、固着あり、骨浸潤なし。  
細胞診にて間葉系腫瘍と判断。  
リンパ節転移・遠隔転移所見なし。  
コア生検にて悪性間葉系腫瘍と診断。
- ・ 臨床診断：悪性間葉系腫瘍。



左大腿部に発生した腫瘤



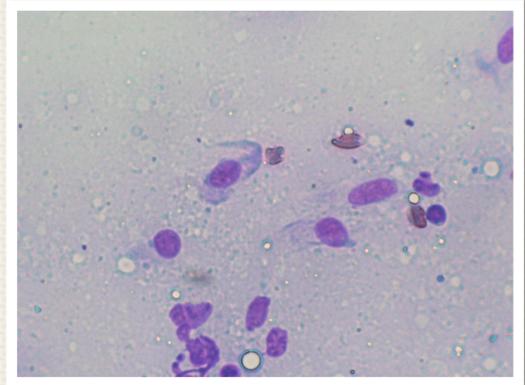
断脚した患肢

- ・ 治療：根治目的として外科手術による後肢体幹部断脚術。
- ・ 確定診断：悪性間葉系腫瘍（由来不明）。  
グレード2、マージンクリアー、リンパ節転移なし、脈管内浸潤なし。
- ・ 経過：術後、定期検査のみ。  
2015年1月現在、術後2年経過するが再発・転移なし。

## 【臨床症例】

### \* 犬の肉腫

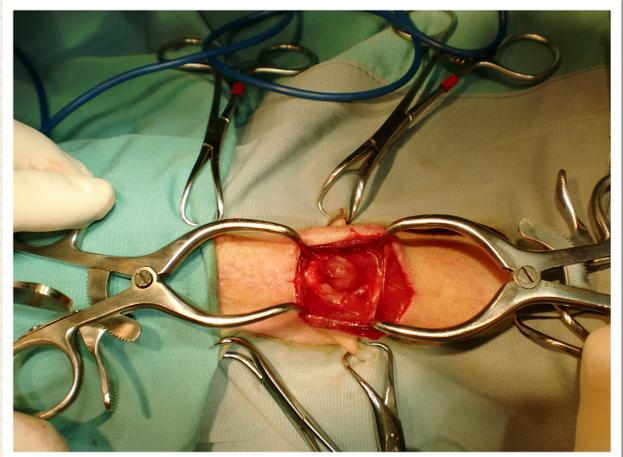
- ・ 症例：マルチーズ、13歳10ヵ月齢、去勢雄。
- ・ 主訴：腹側頸部の腫瘍。
- ・ 症状：腹側頸部の腫瘍、一般状態は良好。
- ・ 検査：腹側頸部の皮下に腫瘍病変確認、固着なし。  
細胞診にて間葉系腫瘍と判断。  
リンパ節転移・遠隔転移所見なし。
- ・ 臨床診断：悪性間葉系腫瘍。



細胞診



腹側頸部の皮下に発生した腫瘍



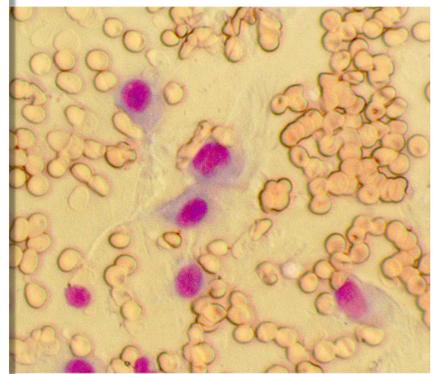
外科切除

- ・ 治療：根治目的として外科手術による腫瘍切除術。
- ・ 確定診断：悪性間葉系腫瘍（由来不明）。  
グレード1、マージンクリアー、脈管内浸潤なし。
- ・ 経過：術後、定期検査のみ。  
術後1年9ヶ月に心不全により死亡、最後まで再発・転移なし。

## 【臨床症例】

### \* 犬の神経鞘腫

- ・ 症例：雑種犬、14歳7ヵ月齢、去勢雄。
- ・ 経緯：10ヶ月前に右前肢第4指に腫瘤発生、半年後拡大傾向を示し近医を受診したところ外傷の治療を受ける。  
改善なく、専門的な診断および治療を希望し当院へ転院。
- ・ 症状：右前肢第4指の腫瘤、一般状態は良好。
- ・ 検査：右前肢第4指に腫瘤病変確認、骨浸潤なし。  
細胞診にて間葉系腫瘍と判断。  
リンパ節転移・遠隔転移所見なし。  
パンチ生検にて悪性間葉系腫瘍と診断。
- ・ 臨床診断：悪性間葉系腫瘍。



右前肢第4指に発生した腫瘤

細胞診



断指術



切断した第4指

- ・ 治療：根治目的として外科手術による断指術。
- ・ 確定診断：神経鞘腫。  
グレード1、マージンクリアー、脈管内浸潤なし。
- ・ 経過：術後、定期検査のみ。  
術後1年8ヶ月に肺の多発性腫瘤確認、術後1年9ヶ月に死亡、最後まで再発なし。

## 【臨床症例】

### \* 犬の線維肉腫

- ・ 症例：G・レトリバー、10歳5ヵ月齢、避妊雌。
- ・ 経緯：6ヶ月前に右外側大腿部に拳大の腫瘤が発生、2ヶ月前に近医にて切除生検を行い悪性腫瘍の診断、以後アガリクスを投与していた。  
再発、疼痛、自壊、拡大傾向を示したため専門的な診断および治療を希望し当院へ転院。
- ・ 症状：右外側大腿部腫瘤。
- ・ 検査：右外側大腿部に腫瘤病変確認、固着あり、自壊あり、骨浸潤なし。  
細胞診にて間葉系腫瘍と判断。  
リンパ節転移・遠隔転移所見なし。
- ・ 臨床診断：悪性間葉系腫瘍。



右外側大腿部腫瘤



断脚術



切除した腫瘤

- ・ 治療：外科手術による後肢体幹部断脚術。腫瘤は一部、寛骨に固着していた。
- ・ 確定診断：線維肉腫。  
グレード2、マージンクリアーだが際どい、脈管内浸潤なし、リンパ節転移なし。



術後2ヵ月

- ・ 経過：術後2ヵ月に右側最後乳腺部に腫瘤発生、再発と判断。  
再切除を行い、補助的化学療法を実施。  
術後4ヵ月に肺転移を確認、術後5ヵ月に死亡。

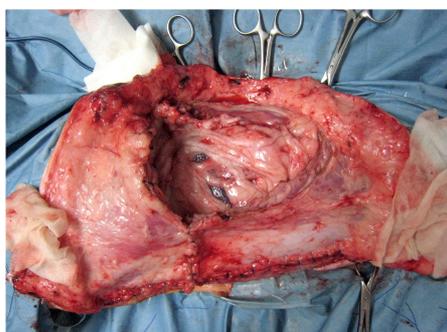
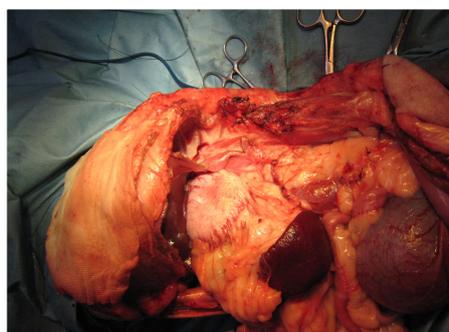
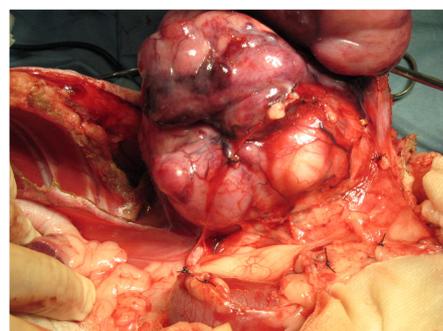
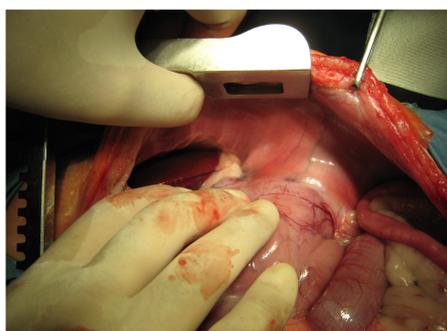
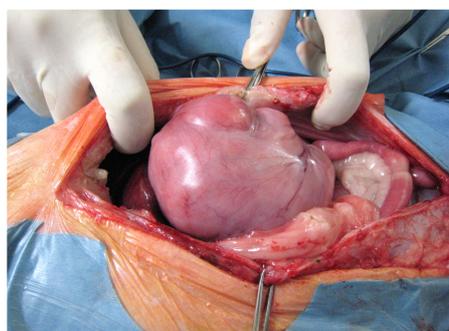
## 【臨床症例】

### \* 犬の線維肉腫

- ・ 症例：シェルティー、6歳8カ月齢、避妊雌。
- ・ 経緯：左側最後肋骨付近の皮下に発生した腫瘤を主訴に地元である大分市の近医を受診、腫瘍の可能性を指摘され大学病院を勧められる。  
専門的な診断および治療を希望し当院へ転院。
- ・ 症状：左側腹部の腫瘤、一般状態は良好。
- ・ 検査：左側腹部の皮下に腫瘤病変確認、固着あり、  
腫瘤は直径15cmで腹壁を貫通し腹腔内にまで進展している。  
細胞診にて間葉系腫瘍と判断。  
リンパ節転移・遠隔転移所見なし。  
コア生検にて線維肉腫と診断。
- ・ 臨床診断：線維肉腫。
- ・ 治療：外科手術による広範囲拡大切除術。  
腫瘤は腹壁を貫通し、左側後腹膜まで浸潤していた。  
横隔膜の一部と左側腹壁ごと拡大切除を行い、腹壁欠損部はバードコンポジックスメッシュで閉鎖。



左側腹部の皮下腫瘤



- ・ 確定診断：線維肉腫。  
グレード3、マージンクリアー、脈管内浸潤なし、リンパ節転移なし。
- ・ 経過：術後8カ月の定期検査にて左側腹腔内腫瘤（直径5cm）を確認、再発と判断。  
再切除を実施。  
術後11カ月に原因不明の突然死。

## 【臨床症例】

### \* 猫の線維肉腫

- ・ 症例：アメリカンショートヘア、9歳4ヵ月齢、去勢雌。
- ・ 主訴：右側腰部付近の皮下に腫瘤が発生。
- ・ 症状：右側腰部の皮下腫瘤、一般状態は良好。
- ・ 検査：右側腰部の皮下に腫瘤病変確認、固着なし。  
細胞診にて間葉系腫瘍と判断。  
リンパ節転移・遠隔転移所見なし。  
コア生検にて線維肉腫と診断。
- ・ 臨床診断：線維肉腫。



右側腰部の皮下腫瘤



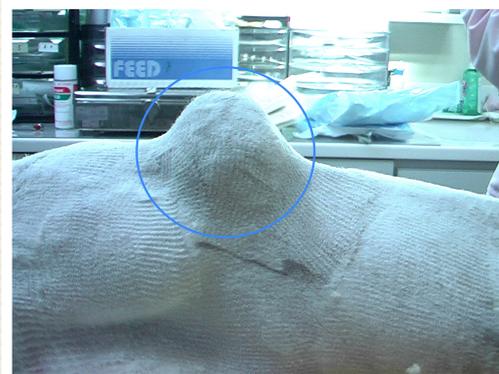
広範囲拡大切除

- ・ 治療：外科手術による広範囲拡大切除術。
- ・ 確定診断：線維肉腫。  
グレード2、マージンクリアー、脈管内浸潤なし。
- ・ 経過：術後10ヵ月に拘束型心筋症による大動脈血栓塞栓症発症、2ヶ月半後に死亡。  
最後まで再発・転移なし。

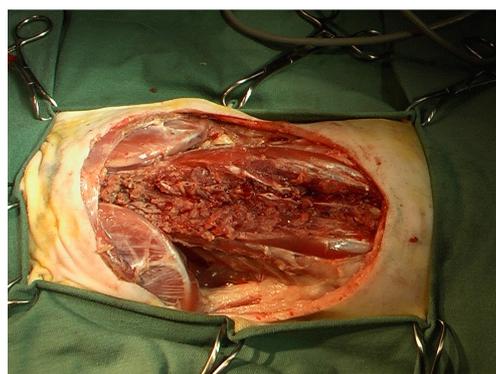
## 【臨床症例】

### \*猫のワクチン関連肉腫

- ・症例：日本猫、6歳齢、避妊雌。
- ・主訴：背側頸部の皮下に腫瘤が発生。  
以前よりこの部位にワクチン接種。
- ・症状：背側頸部の皮下腫瘤、一般状態は良好。
- ・検査：背側頸部の皮下に腫瘤病変確認、固着あり。  
細胞診にて間葉系腫瘍と判断。  
CT検査にて椎骨棘突起付近までの浸潤確認、  
リンパ節転移・遠隔転移所見なし。  
コア生検にて線維肉腫と診断。
- ・臨床診断：線維肉腫。



背側頸部の皮下腫瘤



- ・治療：椎骨棘突起を含んだ広範囲拡大切除術。
- ・確定診断：線維肉腫。  
グレード2、マージンクリアー、脈管内浸潤なし。
- ・経過：根治。